21年1月29日(木)
奈良新聞
朝・夕一面版

清流復活へ 大和川の挑戦

「日本一汚い川」からの脱却

NPOや企業が協働

県内を流れる一級河川、大和川。大和の名前通り県を代表する川だが、水質調査では国が管理する全国百六十六河川で平成十九年まで三年連続ワーストワンとなっている。かつては人々が泳いだり、さまざまな魚が生息して県民の憩いの川であった大和川。豊かな歴史文化を持つ日本のふるさとに清流を取り戻すことが、県民のこれからの課題ともいえるだろう。そこで、大和川の水質改善について連載をスタートする。第一回は、大和川の現状と、県が中心となって昨年十一月設立した「大和川清流復活ネットワーク」について。同ネットワークは、来年の平城遷都一三〇〇年祭に向けて大幅な水質の改善を図る計画だ。

大和川は、高度成長期に水質の悪化が進み、昭和五十三年には汚れの度合いを示す生物化学的酸素要求量(BOD)が一㍑当たり19・7㍉㌘となっていた。流域の下水道の普及、水質改善の取り組みにより平成十九年は4・7㍉㌘にまで改善されたがワーストからは脱却できていない。

平成二十年調査では3・7㍉㌘にまで改善され、全国ワーストワンを返上するという見込みもあるが、文化観光県にふさわしい川にはほど遠い。

国内の主要な文化観光都市の河川と比較してみると、その汚さは歴然としている。仙台市を流れる広瀬川はBOD0・8㍉㌘。京都市の鴨川(上流)は0・7㍉㌘。世界的にみても、セーヌ川は2・7㍉㌘、韓国の漢江(ばんがん)は3・4㍉㌘となっている。

なぜ、大和川は汚いのか。県によると、流域は山地も少なく降水量も少ないので水量も少なく汚れやすい▽流域に県人口の90%が集中し、家庭からの生活排水が汚濁原因の多くを占める▽単独浄化槽やくみ取り家庭から未処理で流される生活排水が川を汚す―などが挙げられるという。

県の分析によると、大和川の支流によって違いが著しいという。佐保川上流0・9㍉㌘、飛鳥川上流1・2㍉㌘に対して、菩提川11㍉㌘、竜田川5・5㍉㌘。特に菩提川は全国二千五百五十二河川のワースト三位という。これまでの水質改善の取り組みが一部に集中していたともいえる数字だ。

これまでの反省を踏まえ、「支川ごとにきめ細かな対応を」「行政だけでなく、NPO、住民団体や企業を含めた取り組みを」と十一月に設立されたのが「大和川清流ネットワーク」だ。国、県、流域二十三市町村などで第一回会議を昨年十一月に開き、第二回をきょう二十九日に開催する。

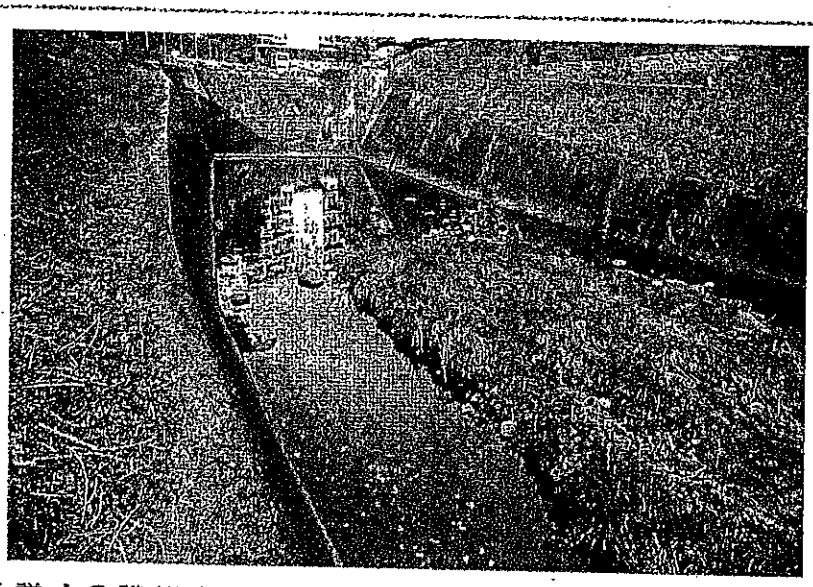
支川ごとの汚濁の状況の徹底的な分析と水質改善計画、県民への情報発信、合流式下水道の改善、NPO、住民団体、企業との協働などを方針としている。ネットワークの活動は全国のみならず、世界の注目が集まっているといっても過言ではないだろう。

※※※

二月は「水質改善強化月間」にあたり、流域二十三市町村一斉啓発キャンペーンを実施する。県河川課は生活排水対策啓発のアクリルタワシ作製講座を二月二十三日に生駒市のコミュニティセンターで開く。参加無料(要申し込み)。詳しくは同課、電0742(27)7507。

=毎月1回、下旬に掲載=

大和川清流復活ネットワーク



大和川の支川の中で水質が悪い菩提川